第四卷八月號

婦人運動

職業婦人社發行

堀井梁歩著

農民新生への道

（最新刊）

四六判上製
定價壹圓貳拾錢
送料拾六錢

本書は最近米國で驚異的成功を收めつゝある「汎農民同盟」の健闘史を中心に農民運動の眞の意味と具體的方策とを示し、農民新生への道を明にしたものである。著者は曾て米國で百姓生活を營み、今は秋田の村落で百姓しながら農民雜誌「大道」を獨力刊行して我が農民問題解決のために大きな寄與をなしつゝある人である。著者曰ふ「本書は、農民がほんとうに自分自身の生活を探求して一つの「地下水の流れ」に掘り當て、そこから噴出し氾濫し瀰漫する現實的力によつて彼等自身の分野を開拓し彼等の活路を打開して行つた勇しい記錄であり實例の提供である」と。百姓愛道場江渡狄嶺氏の跋に曰ふ「凡そ農民運動に關する文獻中本書の如く尊貴な内容を有するもの他にあるを知らぬ」と。農民靑年、爲政者學者教育者の必讀書！

東京市神田區錦町三ノ三
振替東京二九六三九
株式會社 平凡社

八月號目次

前號のおはび

前號は校正に手おちがあつて活字のまちがひが非常に多かつた。宮地嘉六氏のお名前は、わけて念の入つた誤植をしてゐて申わけもない次第であつた。宮地氏、牛田氏を初め、寄稿して下さつた方にも、讀者にも謹んでお詫びを申します。

印刷屋が變るさ、初めの二三ヶ月はどうしても組み方の上でも膠故つくものですが、七月號は組み方や體裁の上にも遺憾な點が多かつた。伊福部さんのお手傳をよくした積りで、代つて校正をやつた私さしては恐縮に堪えないことです。今月は一つうんさ立派に仕上げたいさ、腕によりをかけて構へてゐるところです。(敏子)

每日新聞紙上で全國の暑さの比較表をみながら、各地の讀者の上に思ひをやつてゐます。

もう云ふまい、さ心に決めながら、又しても暑い、暑い、さ口を突いて出るのです。海がいゝ、山がいゝさ云つた處で、澤山の金子が要るさころや、いゝ着物を着てゆかれば輕蔑されるやうな處に紛れ込んで行つたんでは、どうして避暑など出來ませう。

◇

懸命に働いて、それで暑さを忘れること、ださ云ふさ、何だかそこいらの搾取階級の勞働神聖論みたいだけれど、然し、やつぱりうんさ働いて、仕事に精を出して暑さを征服しなければならぬさ思ひます。

七月八月には、休暇のされる人は心ゆくまで遊んで平生の垢や疲れを洗ひざらひさつてしまいなさい。年が年中―休暇のされない人だつて澤山にある―

◇

私だつて休暇なしの組ですが先日も同じやうな境遇の世帶持が寄つて話し合つたことですがせめて月に一回位、何もかもほうり出して、いのちの洗濯をするやうな氣持のいゝ會合を持ちたいものですね。家に居たんでは、結局あれもこれもさ氣になる仕事が眼につくし、心にかゝるのですもの。

◇

お忙しい中から、いろ〳〵手紙を下さつてありがたう。御同樣に、暑い盛夏も、働いてすごして秋をまちませう。どうぞお元氣に。

肝心の伊福部さんが、健康を損ねて、私が代つてこゝで御挨拶をしました。(敏子)

◇

◇

◇

▼誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部　貳拾五錢(郵税五厘)

半年分　壹圓四拾錢

壹年分　貳圓八拾錢

送金法

誌代は必ず前金の事

送金は振替が一番便利てす

誌代の受取證は別に出しません

雑誌發送を以てこれに代へます

大正十五年七月廿八日印刷納本

大正十五年八月　一　日發行

發行編輯兼印刷者　奥　む　め　お

東京市外蒲田町女塚二四七番地

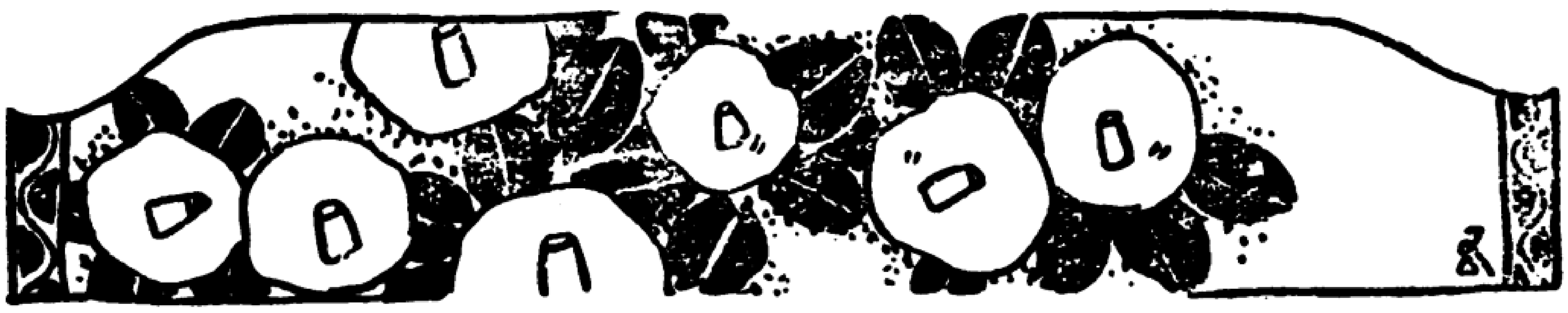
印刷所　京濱印刷所

東京府蒲田町北蒲田六九五番地

發行所　職業婦人社

東京市外蒲田町女塚二四七番地

振替東京六四〇一六番



卷頭言

近ごろ招かれて、よく地方の婦人會の人たちに接近するのでいつも思ふ。

一般には女が、家庭から外に出て働くといふ事は、相當に困難であるのに、ごにかく社會に出て、何かを求め、何かをしやうとするやうになつたのは有がたい。

×

然し、今のところ、婦人會にでも出て働かうとする人は、金子があるか、閑があるか、あり餘る元氣でもあるか、する婦人に限られてゐるやうであるが、然し、さういふ人だけがやつてゐるところに今の多くの婦人會の弱點がある。そんな會では、自分の生活は、生活として全く別な處昔ながらの因循な穴倉にほつておいて、會の上だけでいらさうな、よささうな事を云つてみたり、してみたり、聞いてみたりするだけ。その實際生活の上に會から與へられるものは殆んどないのである。

×

今や社會は急激な變化をとげて進んでゐる。この際、婦人會の活動がいつまでも有閑婦人のまゝ事であつてはならないと思ふ。

貧しい婦人でも、學問のない婦人でも、忙しい婦人でも、みんながその仕事には加はらないではゐられないやうな最も痛切な問題から、日常の實際生活の上にすぐにでも何かの反應をみるやうな點を摑んで――從つて、その土地〳〵の事情に依つて違つていいと思ふ――働きをすすめてゆかねば駄目だご思ふ。

國際勞動團体の最初の提唱者は婦人であつた

東島百合

一八六四年に始めてロンドンに成立した第一インタナショナルに就ては、讀者は既にこれを詳らかにしてゐられることゝ思ふ。故にこの國際團體の成立の歴史に就ては玆に記述する必要はないであらう。只今日玆に紹介したい一事はこのインタナショナル成立以前既に久しく勞働者の國際運動と云ふものが諸方に提唱されて居つたと云ふことの一例これである。そしてその一事實たるや吾々と同性の一婦人の提唱にかゝわると云ふことに興味深いことゝ思ふ、其一婦人とは即ち佛國の才人 FLORA(フロラ) TRISTAN(トリスタン) その人である。

一八四三年に「國際勞働組合」と云ふ小冊子が發刊されたこの小冊子にはかつて、一八三二年にジャン レナウに依つて説かれ、次いでピエール ルルウに依つて説かれた處の、無産階級特別代表制の必要についての思想が、より明確さを以て説かれてゐる。一八四七年にマルクス及びエンゲルスが「萬國の無産者よ、團結せよ!!!」と叫んだあの雄叫びの最初の震動は實にこれであり、且つそれ故にこそこの震動は重大なのである。

この小冊子の著者 フロラ トリスタンは數年間英國に滯在して、當時プロレタリアが政權及び經濟的改革を獲得せんとして、ブルジョアジイに對して決然として立つた。處の峻烈なる階級鬪爭を觀察してゐたのであつた。「一七

八九年以降、ブルジョア階級は設立された……そして一八三〇年にはこのブルジョア階級は、自らを以て自らの王となし、その選擧は自己以外の階級民の意見を無視して行ふのである。且つ「最高權威者」としてブルジョア階級はかつて自ら打倒したる封建大名がなしたる如く、二千五百萬の無產者に、その支配と條件とを强制する爲に、諸の事業の先頭に立つてゐる——ブルジョア階級は土地の所有者として、自ら自己の資るべき生產物に應じて規定を作るのである。」と彼女は言つてゐる。そして更らに「無產者よ貴方方は他に助けを求めることは出來ない。」と言つてゐる。何故なら貴族階級に次いでブルジョア階級が立つたからである。併し旣に今は「より大勢にしてより有用なる勞働階級の設立」は全く正當なる要求である。何故なら「この勞働階級は國民の中の最も根强い部分だ」からである。是非共この階級が設立されゝばいゝ。そして「この階級は强くあらう。その時こそ、無產階級は有產階級に對して、自己の勞働に對する權利と勞働制とを要求し、自巳の主張を貫徹せしめることが出來るであらう」

フロラ、トリスタンはブルジョア階級の除去を提唱しはしなかつた。只彼女が說いた處は政治的社會的權能を目的とせるプロレタリア聯盟であつた。彼女はこの聯盟には凡ての勞働者が性の差別も、政治的及び宗教的信條の差別もなく加入することが出來ると言つてゐる。かくて彼女は、勞働聯盟と云ふものは其一國內の聯盟に止ることなく、「世界的結合の名」の下に行はるべきもので、國民間の差別も、この地上の如何なる國に屬する男女勞働者も些の差別をなさない」と云ふ勞働聯盟の計劃を立てたのであつた。故に「勞働聯盟は英國や、獨逸や、伊太利やその他全ヨーロッパの主要都市に通信委員を置くであらう」と言つてゐる。

これに依つてみるにフロラ、トリスタンは只一意、未だ世に知られざるこの偉大なる勞働者の力の組織を目標としてゐたこと言ふことが分る。彼女は確定したる社會的計劃と云ふものは提議しはしない。が只「筋力の正當性を知らしめる」ことを欲した。そしてこの國際勞働團體に於て、職者達をして「現在の社會狀態中に勞働の組織をなすことの可能性を討究せしめる」ことを欲したのである。それより

二十年後の萬國勞働協會そのものも、その最初の綱領に於て、當時プロレタリアの方向を示さうとしてゐた、諸學派中のたゞ一にのみ附屬すべきではなかつたであらう。

フロラ、トリスタンは勞働者をしてこの偉大なる計劃に共鳴させやうとして多くの講演をしたのであつた。この宣傳の費用は當時最も世に現はれてゐた文學者達、殊に、ユウジエーヌ シウエ等が據出したのであつた。併しこの最初の勞働階級の萬國的團結の要求は反響を得ずに終つた。それから四年後にマルクスとエンゲルスに依つて投げられた第二のこの團結の雄叫びも、直ちに世人の耳目を蒐集することはやはり出來なかつたのである。

× × ×

フロラ、トリスタンの傳記を詳しく紹介したいと思つたが、其材料が手に入らないので殘念ながらこれだけでペンを擱かねばならない。

埋草

——マカーサー女史

組合がないから女子の賃銀はやすい、而も組合がないのは、女子の賃銀がやすいからである。

◆ 最低賃銀制を制定することの價値は、啻に最低賃銀それ自体のみでなく、賃銀の安い職業に於て組合組織することの第一歩になるこいふ事にあるのである。賃銀が少しでも增しさへすれば、それだけ組合運動が容易になり、從つて一般勞働條件を改善する途が拓けて來る。

◆ 組織されてゐない勞働者が罷業をするときは、常に、彼等の間に組合を作らせる誘因をなすものである。もしこの場合組合があれば傭主は無暗に組合勞働者の權利を侵すやうなことは差控へるから、從つて、萬已むを得ない限り罷業は行はないものである。組合があるからストライキが起るといふのは、全然間違つた考へ方である。

（マカーサー女史は英國の婦人勞働組合運動の先覺者です）

あなたの近況は如何

諸家の回答

山川菊榮

男でもさうでせうが、——　女でも、なまじ女學校などを出た爲めに、中途ハンパでこまる人間の多いことです。これはひとごとのみならず、自分自身の上でも感ずることですが、家庭生活に關する事務を見る點では、今の女學校敎育を受けた女は、姑に仕込まれた舊い時代の主婦に叶はない、といつてこれといふ專門の技術をもつてもゐないので、獨立して食つて行くにも行き兼ねる。といふやうなディレンマに陷つてゐる者が多いやうです。苦しい思ひをして女學校などやるより早く職業敎育を施して一人前の職業婦人を作る方が、中以下の階級では本人にとつても、親にとつても有利ではないでせうか。

女學校さへやればい〻お嫁の口があるものときめてか〻る親も無益な苦勞をするにすぎず、娘としてもどうせ働かねば食へぬのに女學校さへ出れば働かずに食へる身分になれるやうな幻影を抱くことは、全く將來をあやまる元になります。

女學校と小學校出との間は、智識その他の點にも變りがないやうに思ふのは僻目でせうか。

とにかく私は、お孃さま本位の今日の女學校敎育の價値を事每に疑はずにはゐられない氣がします

今日のやうな個人主義的な家庭生活は段々亡びてゆくものですから、今日の家庭生活に順應するやうに娘を育てることは勿論論外ですが、其代り新しい社會生活にもつと順應する敎育が必要だと思ひます。

木蘇穀

拜復別に特に深く感じてゐることもありませんが、この頃最も痛切に感じられることは、世の中は結局力の爭鬪に過ぎないといふことです。勿論、單に力と云つては誤解される恐れが充分ありませうけれども、どんな形で現はれるにしろ、要するに人間の生きて行けるのは力であり、力の無い者は滅びるの他はない、さうしてそれが自然なのだ、——さう私は思ふやうになりました。理屈を云ふといふことは、大概の場合力のない者

の若しくば力を失つた時の泣き言的表現です。匆々

生田花世

私の近況より

歸省の途中志摩鳥羽港によりました。といふのは、その風光を慕つて來たのとこもに、海女を見たいとおもつたからでありました。「海女」この古い日本の海の職業婦人の生活の實際は、昔から私の心にいろ〳〵の考へをよんでゐました

二人やとひました一人前二圓でした。その海中での身のあやつり方の巧みさ。二圓ではまことにすまないやうな氣がしました。たゞ〳〵おどろきました。

辻潤

自分の仕事に對する疑惑、自分の生活に對する嫌惡、肉體的勞働に對する羨望、無智蒙昧の幸福、文士に對する輕蔑、無意味な訪問客の煩累、自分の滿足するやうな仕事の出來ぬこと、人間の生活は到底ユウトピヤなどには到達しさうもない強い感じ一切の論議の空疏なこと、凄まじい實質の喧騒と奸計と廣告との巧妙なる爭鬪に充された文學の大道になつては頑健な手と、力強い意志と、殘忍な心とを必要とすると云ふことなど。

安成二郎

居の定まらざるは心の定まらざるなり。われ二十年前上京して以來、或は親兄弟と共に、或ひは身一つに居を移すこと十餘回、自ら家を營みて十五年間に十七回に及ぶ。而も最近の大久保百人町に住むこと十年なれば最初の五年間に十六回なりし也。顧みて流浪を苦しみと爲さざりし若さを懐かしむ事切なり。今十八回目の居を府下杉並町阿佐ヶ谷松山二七七に移し營む、恐らくは之れわが終焉の地たるべし。家は中央線阿佐ヶ谷驛を出で、左に踏切を越え、眞直ぐに北に向つて行くこと八百歩、十字路の左側、E荒物店に沿うて左折し又行くと二百歩、左側、人家の盡頭にあり。主人多く家に在らざれど、荊妻の喜んで一杯の茗をさゝぐるあり、漫歩の途、小門を過るの榮を待つ、四邊閑寂、夜、深くして梟頻りに鳴き、晴れたる朝は縁に立ちて富士を眺む、又、新緑の風光すて難し。四時の序、谷々その趣あらん。ただ我が身、心未だ定まらずして居を定め、こゝを心の住み家となさんとす、老いたるにあらずやとひとり問ひ、ひとり自ら答ふるのみ

千葉龜雄

大阪に來まして丁度一ヶ月、匆忙の間に日をくらして了ひました、まだ何だか落着いた氣になれず毎日二十分の夙川大阪間電車の往復で、大阪人觀察をやつて居ります。まだ昨今だけの觀察ではわかりませんが、金が中心になり生活の豊かな土地ほど、時代の婦人問題に對する女性の興味は稀薄の度が强いのではありますまいか。名古屋では殊にこれを感じますが、大阪でも同樣な感に打たれます。尤も本當の事實が、この私の推論を裏ぎつて居るのなら大變結構です。

池田小ぎく

もう大阪へ來る時分ぢやなかつたかしら、と心待ちにしてゐるが一昨夜はあばれ手紙を出したが

あれは、あの晩、(東洋圖書會社の)永田與三郎氏から、會社がうまくゆくといふので、同僚がみんなよばれた、そのとき、八人の男と私たちとの間に結局出來上つた合作だ。みんなあなたの上に好意をよせてゐる。永田氏もあなたのために大いに聲援した。

うんと、いゝ仕事をしてくれ。

與謝野晶子

拜復

少しばかり編纂物をしてゐますので、その校正に追はれ、到底、外へは何も書くことが出來ません御諒照下さいまし。

中西伊之助

近頃「東京」と云ふ雜誌を見ますと、私の「珍癖」は少しもじつとしてゐられないたちで、新聞記者から勞働運動、それから作家、更らに最近は農民自治會の運動で、東奔西走してゐると云つてゐますが、その中で何一つロクなことのできないのも、やはり私の「珍癖」かも知れません、だが、私の事業はたつた一つ、大正九年監獄から出て來た時に志ざした農民運動です、農民自治運動です。これが私の終生の仕事です。この夏は、自治會では、秋田で爭議が起りさうです。日本の改造は、農村からです。商工社會主義運動は、日本では的外れです。農民自治運動でなければ、日本は救はれません。

土屋ならゑ

女性の大部分は、ほんとうに同姓を助ける事は自らのためだとは知らないで、やつぱりいゝ仕事があつてもそれを助ける所か、それを惡くしやうとさへする人があるのを時々見て淋しい氣がします。

見るもの聞くものに歯がゆい程の女性のたよりなさを自分自身の中にも見出して、時々私の頭も心もゆきつまつてしまいます。然しゆきつまらないで努力をつゞける事は、社會が男子に依つて腐蝕され、女性に依つて腐蝕してゆくそれらから救ふ事になるのだと思ひますね。お互ひに力を協せて進みませう。

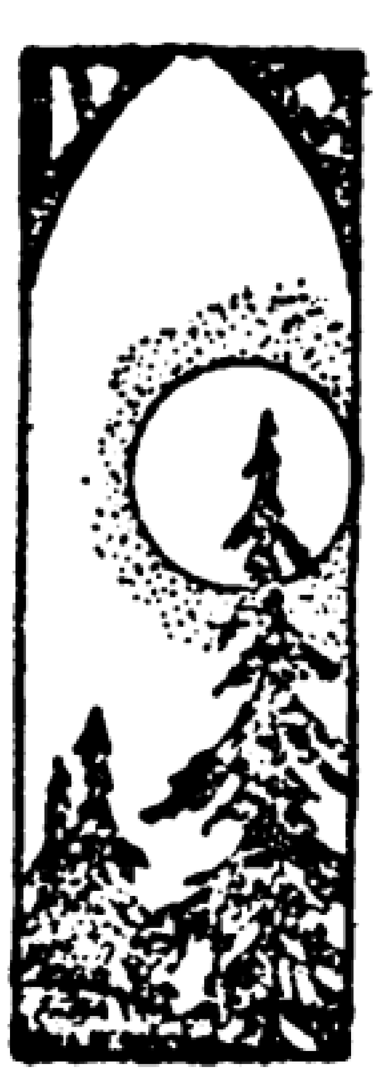
多くの女性が、云ひたい事もよう云はずに壓しつぶされてゐるのを見るにつけても、痛感致します

奥むめお

私は先日、郷里（福井）の縣教育會から招かれて、それこそ表玄關から福井に入つたわけでした。私は性來大がかりな派手な表沙汰なことに堪えない人間です。友人の家の二階から昔ながらに豊かに生ゑ繁つてゐる河原の叢に沿うて流れてゐる足羽川の水に目をおとしながら、何かから、うしろからお母さんか、お祖母さんかのやさしい腕でものびて勞多かつた私の今日までの鬪ひに、張り切つた氣持で幾多の艱難を飛び越ゑ踏み越ゑてたゝかつて來たこの私の心もからだもが、溶ろけたさうにまで抱きしめてくれるやうな思ひで、しみ〴〵と瞼が熱くなるのを覺ゑたことでした。

昔に變りない愛情や友情で私が多くの人から迎へられた事は、今ではもう憶ひ出すことさへ出來なくなつたやうな昔の子守唄が、ふーつと聞こえて來て、やさしくかい撫で〳〵してくれるやうでもありました。

將來艱難いよ〳〵しげく、苦しみも大きくなるばかりに違ひないこの仕事の上を思ふにつけても、わが搖籃の地福井が、いつまでも〳〵私のために、最後の憩ひの地として、慰めと勵みとを與へてよく働かせてくれるやうに、こ、心から希はずにゐられないのです。



一文筆勞働者のありのまゝ

新居格

近況乃至感想

をこの御問合せに應じ、そのうちの近況にもなり或ひは感想にもなるかも知れないこの一文を書きます。

僕は近頃、平凡な願ひを願ひとしてゐます、それは夜は早く寢て、朝早く起きたいと云ふことです。もつと正確に云へば朝は必ずしも早くなくてもいゝが、夜は早く就床したいと云ふことです。云ひかへると簡單になる即ち睡眠を充分に持ちたいと云ふこと。その理由は僕の頭腦は弱くて疲れ易いから（それが一つ）眠つてゐて何もかも思はないことはプロレタリアには慰めでもあり。消極的な享樂にもなること。

あまり無茶な生活が出來ない。またしたくもない。これも極めて平凡な願ひ、それは比較的規則正しい生活がしたいと云ふこと。でそれをさきの願ひとちやんぽんにすると夜早く寢るといやでも朝は早く起きれる。朝の内夏はとり分そうだが、朝疲れてない頭でよみ書きがしたいのです。朝の散歩なんて、一度やつてみたいものだとは思ふが、それはその言葉が與へるほどいゝものではないかも知れない。また曾つて朝の散歩をしたことはない。カントのやうな男が瞑想しながら、朝の露の路を歩いてゐるのを想像するのは鳥渡洒落てるが、僕では似合ない。似合ふも似

合はないもない、やることなんかないのだから、それに朝の散歩なんて、ブルジョアの別莊地のにほひもしないではない。それも氣になる。朝の散歩はどうでもいゝが、朝だけは早く起きたい。そのために、夜は宵から寢たい。從つて夜外出して遲くなりたくない。小生があまり銀座なんかへ散歩に行かないのはそのためである。夜の會合もすきではなくなつた。特に酒を、夜飲む機會をもつのはすきでない。第一、酒もビールもきらひだ、飲んでも一向うまいとも思はぬ。飲めばよふ。よふと眠くなる。そんなときには家にゐて宵から眠ることを思ひ出す。それに酒をのむと興奮して中々眠り付かれぬ。翌朝がこたへるのみでなく、翌日全體が駄目になる。あたまがボーウツとして駄目だ。

そんな年でも

ないんだが徹底して仕事をする元氣がなくなつた。由來精力家ではないのだが、近ごろは更に精力がない。こんな男は、文士がやるやうな藝當や、精力家がやるやうな努力は出來ない。だとすると結局、疲れ易い頭をつかれなく使ふことゝ、少さい時間を有効に使ふ工夫をしなければならない。だから、夜の時間を、都會人らしくカフエーや劇場や、會合や娛樂や夜更けまでの散步に使ふことの代りに、田舍の人のやうに宵から眠ることにしてゐるのが小生の近頃である。

新聞はあまり詳しくよまない、よみたくもない。極く大体、しかもチラと一瞥をなげるにとゞめる。

それでゐて正午頃にはまた眠くなつて晝寢する。そのとき人が來て起されるのはつらい。一寸なさけなくなる。と云つて斷はる勇氣は僕にはない。

僕はあまり人を訪ねないが、人によく訪ねられる。それは好きではあるが、同時に仕事も出來ない。忙がしいのですから、この次にして下さいと、云ふことの出來ない氣の弱い僕である。また人が訪ねてくれる場合、どんなに忙がしい仕事をしてゐても、その仕事が遲れると金の方にもてきめんに困る結果になる場合でも、それでも犧牲にして人を快く迎へなければならぬとする弱氣の僕である。客は、一向に名聲もなく（のみならず、ほんとうに何の取柄のな

い）僕であるにも拘はらず、よく訪ねて來る。そして話しで一日何もせずに、しかも仕事をしたとき以上に疲れる。

僕なんかはプロレ

文筆勞働者だから原稿報酬も少ない、小說の流行大家が一枚かく稿料を得んとすれば、五枚乃至十枚はかゝねばなるまい。

プロレ文筆勞働者は、ブル文士の何倍か永がく机にくつゝいてゐなけりやならないし、それだけでなく何倍かの仕事と、勉强こしなければならぬ。人と談話してゐるのは全く氣がさす。工場で働いてゐる連中から考へると、僕なぞの生活はけしからぬ。工場なぞで働いてゐる人達はよく就業時間中面會謝絕の札がかゝつてゐる。あれは雇主がかけたのであるが、僕なぞは生存權（こゝまでむづかしく云はなくも）食つて行くための仕事が就業中面會謝絕をさせたがる

僕は一週間のうち六日は遊びたくない。食ふためにコツ〳〵やることゝ、コツ〳〵本をよみたい。だから、用件を簡單に云つてくれるか、用件なら手紙で更に急ぎの用件なら速達もきくのだからもつぱら手紙にしてくれるならいゝなあと心の中では考へる、面會日をきめるのは大家や學者のすることで僕なぞのペイ〳〵がすることではなさそうだしてもいゝ譯だがそれも氣取つてゐて氣が差す。が來客が多いと本をよむ時間も筆を執る時間もなくなつて、夜になるとウンと疲れて屁古垂れる。

心の中で來訪者よ。頭の弱い男の、食つて行くことに使ふべき仕事の時間こ勉強の時間とをあんまりむざんにうばはないで吳れと云ひたいが、氣が弱いからそれも云へない

これは今も最近のなやみではない。が、たゞ最近これを泌々思ふのである。

だから最近の感想

としてまた近況として云ひたい、僕の友人知人並に未知人、日曜日位に遊びに來てくれと云ひたい。

その他は疲れやすい頭の男を疲れと、貧しい知識の男が今飜然悟つてポツリポツリ本をよみ出しかけてゐるその時間に好意をもち、夜は早く寢るさうだから、晝間は疲れて休

養のために眠るのだそうだから、と精々察してくれること が何よりも願はしいのである。これはつまらぬことだが、實際さう思つてゐるのだからかきしるしたのである。

そう思ふ反對には精力あまりあつて疲れない人々、あらゆる事に興味をもち、大いに遊び大いに夜ふかしもし、大いにのみもし、それでゐて見るものは何でもを見、きくものは何でもすき、喋べり講演し動き冒險し、享樂もし、實際運動もし元氣もあり精力もあり、生々した人々の生活をうらやんでゐると云ふことにもなるのである。

なつ來る

おく・ねいち

初夏よ
わかれて遠し紀伊の國
住む父もなし　住む母もなし

□

背に負ひし吾子が指す落日に
向ひて歩む
場末の街を

□

月末の悲哀よ
ひとり野に出でゝ
葦の笛など吹きてたはむる

金なきは首なき如し
なあにくそ
伸びたる首の泥ぼうに似る

□

仙人になるすべなきや
六月の青野に立ちて
しみ〴〵思ふ

□

あか〳〵と武藏の原の夕燒を
だれが云ふたか
東京の市

社會思想の壓迫と學生の自由擁護聯盟

さきに學生の社會科學研究會に加へられた文部省の壓迫に對して、全國學生自由擁護聯盟が生れて社會思想研究の自由のために徹底的にたゝかふ事になつた。去る六月廿八日に行はれた發會式には、關東側からは學生自由擁護聯盟、雄辯會軍事教育反對聯盟等二十四校から出た二十八團体、關西側からは京大、同志社大その他から計十二校より、東北では東北帝大と外に三校、及び九州帝大の四十一校の代表者が集つて盛んな意氣を見せてゐた。

◆

事の起りは、岡田現文部大臣が就任以來、全國の高等學校や各專門學校の社會科學研究會に解散を命じ、あらゆる壓迫を加へた事から初まる。學校の外に於てする講演會や演說會を禁じ、學校內にある研究會や讀書會を禁じ、個人の自由な研究にまで壓迫の手をのばしたばかりでない、「テーゼ會」などといふありもしない會を捏造し、又はすでに公然と發行されてゐる無產者新聞やその他を押收して、これに秘密出版だといふ罪をことさらに捺上げて學生や、教授を壓迫したのである。學生社會科學聯合會では、

「社會科學研究會は敢然起つて大學當局に抗議せよ!! 社會科學研究會を支持せよ!! わが學聯は學校當局の盲目的彈壓に對して抗議す」

といふスローガンを以て挑戰した。

實にこゝから學生自由擁護聯盟が生れたのである。

◆

久しい間、學生々活は社會の片隅に靜かに放置されてゐて、社會とまるで沒交涉にでも學生は生きてゆけたのであるが、最近の社會的變化は、學生の生活もまた一般社會生活と離れることの出來ない關係にあることを意識せずにはゐられなくなつた。一般社會生活上のちよつとした變動も、又激動は勿論學生の生活にも影響を及ぼさないではおかないものだといふことにみんなが氣づいて來たのである。

そして、もう今までのやうに一般社會生活に就いて無知ではゐられなくなつて、學生としての立場からも自分たちのまはりの社會生活の研究に入つてゆくやうになつたのであつて、これはむしろ當然の傾向である。

◆

婦人も長い間社會生活と沒交涉に家の中にとぢこもつて來た。然しながら今や個々の家庭の中にも、そして、無智蒙昧であつた婦人の上にも、社會から吹きおろす大嵐が大なり小なりの影響を齎しつゝあるのである。婦人も亦一般社會生活に就いて多くの事を知らねばならぬ時はもう來てゐる。

この時に私たちはこの不當な支配階級の壓迫をよそ事として眺めてゐる事は出來ないのである。



紡績工場を視察して

やまこ

低いトタン屋根に水のやうに流れてゐる月の光りの中を、私たちは、とある辻を曲つてから十軒ばかり人家を越して目ざす××工場に着きました。

ゴーツ〱と地響きさへさせて鳴り響く機械の音は、今までひつそり閑と寝静まつてゐる中を歩いてゐた私たちの胸に今更のやうに、あるショツクを投げました。

「あそこで！みんながあそこで就夜業を働いてゐるのだ!!!」

「これで小學校を卒業してゐるんでせうか」

見るとあんまり思ひがけず、澤山の小さい子供が――それこそ阿母さんの乳房でも未だ欲しさうな小娘が、こましやくれたもの越しで、忙しさうな手つきで働いてゐるのです。

「何といふ器用さだ…」

實際、この器用さ故にこの虐使があるんだと考へられて、娘たちのために持つて生れたその器用ささへ呪はしいのでした。

□

中に一人、非常に眠さうな目をこすり〱泣いてゐるのかと疑はれた程の娘がありました。

「眠たいの」

と聞くと、黙つて首をたてに振るばかりです。

「いつでも今頃――(二時三時夜中頃)になると眠いの」

「今日の晝間、あんまり暑かつたのでちつとも眠れなかつたものですから」

むし暑い晩など、晝の疲れで弱り切つてゐる時でさへ中々眠りがたいもの

てす。况して近頃のこの暑い日の眞盛りを立て閉めた部屋の中で、夜業の日は、ひるの内にねむつておかなければならないのです。

私たちの視察した寄宿舎の一室は廣さ二十疊、それに十八人の人が、頭をつき合はせにして寢るのです。實にぎつしりでありませんか。晝業の組の人たちが、疲れ切つた身體を投げ出してねてゐました。その姿は、實際正視に堪ないものでありました。

「こんなにしてねかしておく程にして切りつめてやらなくては、商賣が成立たないといふのであらうか、あまりに非人間的の取扱ひといふものだ！」

私たちは、交互に、義憤し合ひました。紡績工場では景氣のよい頃には世間から批難された程莫大な、何十割といふ利益配當をしてゐたのです。世間が不況な當今でも、相當の利益をあげてやつてゐるのです。その利潤は實に實にかくの如き搾取に依つて、このいたいけな、娘たちの働きから積みあげられてゐるのです。

□

工場に働らく娘たちも、もういゝ加減に目ざめなければいけない。目をあけて資本家のふところに流れて入る純益金の多すぎることゝ、朝から晩まで又、晩から朝まで、勞しつゞけてゐる自分たちに與へられる處の賃銀のあまりに少ないこゝに就いて考へてみなければならない。何故？何故？何故…會社の社長や、工場長や、株主連等の住宅の立派さに比べて、これは又何といふひどいあなた方の住居だ…ガランとした殺風景な廿疊に、十八人宛のすしづめた、三千人に、二坪程の浴槽一つ、あなた方は、それだけ働いて食べたいものも食べられずに、あてがい扶持で、あの鹽つ辛いじやが芋の煮つけや、どぶ水のやうな味噌汁や、もやしばかり食べなければならないのか。

あなた方はあの工場の中の綿ぼこりに平氣だと云つてゐるけれど、あなた方が平氣になつたこて、身體を内から損ねてゆく綿ぼこりの害毒はやみはしない。年々、恐しい勢ひであなた方の仲間は病氣になつて行つてゐるでないか。工場の働きに堪えられなくなつて郷里に歸つては死んでゆくあなた方の仲間だつて、可なり多い筈である…

あゝ目をさまして御身の境遇を振りかへつてみよ。

去年の今日

大竹清子

恰度一年前のけふ、私は黒海がよひの汽船、「ペステリ」號に乘つてクリミヤの海岸を旅行してゐた。その日記の中から——。

七月八日。私の乘つて居る船——ペステリはこの春、英國の左傾勞働組合、ソヴエーツ　ロシア視察のため派遣された一行のうちの團長ペステリ氏の名をとつてつけた號である。

アムステルダム勞働組合と、モスクワ勞働組合の合同運動が、モスクワ側から强く、はたらきかけられてゐる時でもあつたから、それに贊意を表したペステリ視察團が、ばかにもてはやされた。そのシンボルが汽船「ペステリ」號となつた。子供だましの樣でもあるが、今のソヴエート　ロシアの流行の一つである。

その「ペステリ」號の甲板の上で、私は一人のコムソモリカ（共産青

婦人界近事



◆

大阪職業婦人聯盟、濱寺海岸の木かげに靜かた別莊を借りうけて、職業婦人のための夏季休養所にあてました。南海線諏訪の森で下車して三丁戻つた處です。八月一日から三十一日まで、一泊三食つきで八拾錢中食だけで二十八錢。

日頃の疲れをこゝに憩ふと共に、講演音樂談話會、さては活動寫眞遠足海水浴等で樂しく意義ある夏を送つて秋の活動に資するのです。

◆

處女會の組織、訓練、七月一日から初めた青年訓練所に味を占めた文部省では、今度は全國の處女會の組織改善內容充實、訓練の計畫をたて、二百萬圓の豫算を見積りました。

年團員といふ言葉の女性單數）を加へた數名のコムソモリツィ（同上男性復數）のグループと仲よしになつて話した。彼等及び彼女の一隊は、修學避暑旅行のために　ロストフから、クリミヤの西海岸へ出かける途中であつた。

日本の事、支那のこと、――　若い男性の中にまじつて、彼女も敢けじと私に質問の矢をむける。その智識慾の旺盛なことよ…。その彼女が十七歳であることに、私は深い興味をもつた。彼女は小さながつしりこした黑い顏をして、コムソモリカの表象である、赤い布を被つてゐた。汚い木綿の縞の着物にソマツな靴をはいて、若い男の中に混つて無邪氣な航海を續けてゐた。おひるの時間が來れば、唯一人の女性である彼女は、荷物の中からパンを取出して切つたり、茶を用意したりして、一行青年達の世話をしてゐた、甲板へ出て行く度に、彼女は非常に珍しがつて私に近寄つた。彼女はロシアの婦人解放について私に得意の辯をふるつた私が「法律や制度の上で、ソヴエート　ロシアの女性が解放されてゐることは、よく知つて居る――だが現在の問題として、實際はどうなんです。あなた方の間では、多くの男性達が、ほんとうに女性の立場を、何時でも尊重するやうに、うまく行つてますか」

「殘念ですがまだ封建の數は、多くの男に殘つてゐます。私共女性は、

中央に指導機關をおき、會長も副會長も婦人をあてゝ全國の處女會をしてもつと積極的活動に入らせるにはどうしたらいゝか、についてゑらい人たちが澤山に寄集つて指導の根本方針を協議中です。

◆

とかくお役所案の仕事といふものは時代に逆行したがるものですが、現代の惱みに生きてゐる今の處女たちの心に副ふやうに、當路者はつねに心がけてほしいものです。

◆

國際勞働協會婦人委員の活動、さきに鑛山に働く婦人たちの生活を實地に調べて來て、婦人の坑内勞働は直ちに禁止しなければならぬものであるといふ輿論をこみに高めて活動の歩を進めて來た、同婦人委員會は今度、紡績、製糸、織布、製麻の各纖維工場を關東關西、中國各地に亘つて實地視察をしてゐます。今後益々婦人勞働者の諸問題のために必要な働きを續けてゆく筈

まだ澤山の闘爭を必要とします。たとへば――」

少しのわるびれた樣子もなく、彼女が說明し出すと、私の傍に立つてゐた四十前後の商人風の男――ネツプマンらしい男がいきなり、

「またお孃さんの「闘爭」が始つたね、一にも闘爭、二にも闘爭だ、よくお前さん達の間では闘爭ツて言葉が品切れにならないものだ」

と半でうを入れた。

彼女は一寸てれたが、むきになつて其の男に喰つてかゝつた。四十男は十七歳の少女を涼しい顏をしながら、口先で飜弄し始めた。

實際、革命後のロシアでは「闘爭」といふ言葉があまりに多くの場合に濫發される。ある共產黨員は耳ざわりなほどソレを濫用する。だがこの場合、「闘爭」といふ言葉に反感をもつが故に、待ちかまへたやうに私の對話者である、乙女をへこましにかゝつた四十男に反感をもつた。その男のいふやうに景氣のいゝ言葉の大安賣り、それは何時の何處の國の歴史にも革命時代改造時代、解放時代の運動には例外なしの現象である。それが多少耳ざわりであつても それ程の徵が何で我慢の出來ないことか。

徵の無い所に「醱酵」はない。

です。「紡績工場を視察して」の稿も同委員會が…工場の終夜業を視察して來たときの感想の一端です。

◆

小兒保健所案成る、内務省保健衛生調査會では、我邦で乳兒幼兒の死亡率が年々增加する一方であるので、幼兒死亡率遞減法を具体的に決めて、小兒保健所を設立する事に決めました。

一保健所の豫算六千八百十二圓として、出產數四百を以て一區域と見なして一個所を建てる豫算です。こゝには一名の普通醫師と、姙產婦や乳兒幼兒の家庭々訪問してまはる保健婦一名、看護婦一名がゐて、

醫師は、母性及び小兒の保健一切について敎へること、宣傳すること、保健婦はその地域内の姙婦や乳兒を訪問して姙娠中の心得や育兒上の注意を與へ、又はいろんな相談にも應じて姙婦や乳兒が進んでこの保健所を利用するやうにすゝめる。

看護婦は保健所に出勤して醫師を手傳ひ、又牛乳供給に關して一切の事務を司る。

こゝでは實費以下（一合二錢位）で牛乳の供給もします



無題

大阪の職業婦人聯盟では、八月一日から夏期休養會を濱寺に開く。平生職業生活に心もからだも疲れてゐる婦人たちが集つて、一緒に遊びもしやう。修養もしやう。身體を鍛へもしやうと意氣込んでゐる。未だそう組織もかたまつてゐない聯盟のことであり。積みあけた金子があるわけでもなし、その困難な中で、而も毎日の勤務をつとめながらにかういふ計畫を進めたのであるから、文字通りの不眠不休で委員諸氏ははたの見る目も涙ぐましいほどの奮闘ぶりであつた。

×

東京でも、せめて職業婦人のために心おきなく休める憩ひの家を一つほしい、といつも心にかけつゝどうする事も出來ないで焦つてゐる。やがて女子青年會では數十萬圓を投じてさういふ要求から設計した大きな會館を建てゝ廣く一般職業婦人のために便する計畫だと聞く。小規模のものも、あちこちに澤山に是非欲しいものである。

×

働くことを知つて休むこと、遊ぶことを餘りに知らないでゐたわたしだち婦人が、心一ぱい、からだが溶けるほど憩うて、すつかり疲れのなくなつた元氣な心で、改めて自分たちの婦人として平素おかれてゐる地位を振りかへつてみたいのである。

×

特に家庭婦人の場合に於て、私は一層切にさう思ふ。

世の家庭婦人たちも、そんなせゝつこましい家の中にあくせくとしてゐてヒステリカルに、くすぶつてゐないで精々廣い社會に出でて、社會の濶達な空氣も吸つて呼吸を吹き返へしなさいよとすゝめたい。

×

昨夜東京市の市民講座に出て、久し振りに東京の聽衆の前に立つた。そしてやつぱり東京の聽衆はいゝなあゝとなつかしみ、感謝した。ぴつたりと、私の話さうとする氣持に相應ずるものをもつて、みんなが待ちかまへて呉れてゐるやうでもあつた。

何しろ一人講演だから――と、いろいろ不安であつたが、澤山の人が會堂に充ちてゐたことまで、私の不安は全て用のないものであつた事を知つた。「いゝ聽衆でしたね、」と云つて、Mさんも心から喜んでくれた。

三宅女史は、東京の聽衆は人の講演を聞く禮を知らない、と云つて或時非常に憤慨して、それからは一切東京では公開の壇上に立たないことにしてゐると聞いてゐるが、私の氣持はまるであべこべだ。（おく）

國際婦人參政權同盟

第十回大會傍聽記

「私たちのみが持つ一大財産「母の愛」を提供して……」と

世界の隅々から集つた婦人二千の大會

國際婦人參政權大會の會議の幕は五月三十日（日曜日）の午後八時半パリ大學ソルボーヌ大講堂に於て開かれた會場は代表各國の國旗が縱橫に飾られた。講堂の背後の壁一面に描かれた、有名なシヤバンヌの壁畫と、廣い講堂こは此世界會議を迎ふるに最も適當な場所であつた。

午後八時といふに、會場はもう一ぱいであつた。土間の席に集まる各國の代表婦人の間にはその國獨得の服裝をつけたものもあつた、たつた一人の男の影もその中に見出し得なかつたことは、此の會台が徹頭徹尾女のものであることを一層強く感ぜさせられた。しかしそれは夜會でもなければ劇場でもない。若い令孃風の美しい裝ひを期待してはならない。その大部は三十前後のオールド●ミスでなければ白髮か又は白毛まじりのお婆さん風の女であつた。傍聽者の殆んど八分通りまでが女であつたことも不思議ではない。集るもの實に二千、世界の國々から、四十餘國を代表して參加したのであつた。

アシユビー夫人の挨拶

アシユビー夫人は、この女國際聯盟の長である。

彼女は上品な英國風の婦人である。鋭い才幹と叡智のほどが、彼女の眼のあたりにあり〳〵と見られる。いはゆるオールド　ミスらしい處の更にない如何にもお母さん〳〵した品位の豐かな婦人である。

アシユビー夫人はケンブリッヂ大學に在學中から今日に至る廿餘年間、不斷の努力を婦人運動の爲に捧げて來た人である丈け彼女の辯舌の達者な事理想目的に對する確信の强固なこと人一倍のものがある。一九二三年ローマに開かれた大會に於て彼女は同盟の議長に選ばれてより、今日迄の間一人の國際的婦人として活動して來た。

彼女は微笑を浮べながら演壇に立つた。私は彼女から美しい英語を期待してゐたにも拘らず、彼女の語る處は、流暢なフランス語であつた。彼女は其要所々々を英語で繰返した。しかも彼女の聲は透明で且つ鮮明であつた。演說の要旨は次ぎの通りである。

平等は私達の武器である、世界的理解は私達の建つべき家の基である。そして平和は私達の最終の目的である、私達は婦人運動に歸服する、何故なら人類は改善向上し得る事が出來、自由と敎育と責任とは個人の內に潜む善の總てを、性の差別なく發揮せしめることが出來ると信ずるからである。故に私達は女の自由なる發達を妨害する信念習慣迷信を打破せんとして働くものである。

私達は特權を欲しない代りに、差別待遇をも喜ばない、私達女は總ての職業に對して、或は民事司法外交の地位、生産工業の全てに於て、平等にして公平なる機會を要求するものである。

私達はこの責任を全部脊負ふ爲めに社會が私達に政治と敎育の權限自由を附與する日を漫然と待つべきではない。現在の文化は既に私達女の働きを總ての野に於いて要求してゐる私達はそれ等を獲得すべきである。

婦人の投票權を得ることとそれ自身が可成り至難なことであるが、自由と責任の獲得に於いて、眞の平等を得ることはより至難なことである。政見、階級、職業或は宗敎の差別如何に拘はらず、私達女は一團となつてこの目的の爲めに努力すべきではあるまいか。

今回の大會が私達各自に對する大なる使命は、私達お互ひに力と熱とを持つことである。私達は信念の正義であることを認めながら、時として力と熱とに缺くることがある。私達は遠隔の地に孤立する我がフエミニスト諸姉を助け力づけ行く爲めに、諸威の婦人は日本婦人の手を握り英國の女はブラジル、ペルーの女の遠來の勞を謝し、一團となつて惱みと恐れとにしひたげらるゝ世界に、私達のみが持つ一大財産「母の愛」を提供すべきではあるまいか。

と言葉を結ぶと、聽衆は狂喜してこれに喝采した。

この大會が、一つのプロパカンダとして重要な意義があるばかりでない、更に、參政權問題だけに限らずに、廣く社會問題としての婦人問題を究めてその向上を期するために、六つの委員會を設けて次のやうに、各問題について研究し、聲明をして實行にまで及ぼうとするのである。

一、道德標準の統一と婦人條約の廢止
議長 ポーリナ ルイジ女史
二、男女勞働條件の平等
同 アレンホルト女史
三、結婚せる女の國籍
同 マクミラン孃
四、私生兒と其の母
同 シユライベル女史
五、家族手當 同 ラスボーン孃
六、選擧及被選擧人
ノート女史

最後の大宣傳

國際婦人參政權同盟大會は六月五日（土曜日）をその最終日として一大示威運動の試みをなした。各國の代表女史を滿載した自動車は午前十一時ソルボーヌ大學の前を出發した。車の横には大文字で「總ての女宜しく參政權を獲得すべし」と大書した白布がはられた。一行がパリの銀座とも見るべきオペラ通り、シャンゼリゼーを先にせず觀光者の敢て寄りつかうとしない、バスチーニ、フォーブール　サンマータンと云つた勞働者町を先づ馳廻つたことは極めて眼のつけ所のいゝやり方であつた。仕立屋の窓から首を出した幾多の若い女工達はハンカチを振つて「ブラボー」と叫ぶ、用達しの爲めに町を横切る下女まで立止つて勇ましい車上の女の姿を見送る、一行はパリの到る處で男女の區別なくすべてのものから微笑と好意とを以て迎へられた。

當日午後九時からはパリー一の大劇場トロカデロに於て最後の一擊、平和の一大示威運動が催された。一萬近い觀席を有する大堂も婦人ですし大つめの景氣であつた。それは單に成功といふだけで充分でない、それは實に凱歌そのものであつた。

九時、五百人を下るまいと思はれる大コーラス隊の合唱と共に會長アシユビー夫人は當夜の司會者、佛國勞働大臣モンチ氏來賓下院議長エリオ氏の間に席をとる。多くの代表はいづれも美しい夜會服の裝ひをつけてプラットホームに現はれる、大會こぞつての美人埃及のシャラウィーパシャ夫人の黑のヴェールに包まれた美しい姿は黑絹の國裝をつけた印度代表セン夫人及桃色のお召に菊の裾模樣の裝立ちの宮川女史と共に聽衆の觀視を一所に蒐めずにはおかなかつた。

アシュビ――夫人先づ起つ

「平和に對する私達の信仰を發露する爲めに私達はこゝに集つたそして私達のこの理想が實現せらるゝ日のあることを私達け信ず、すべての世に武者の力を制する武者は多々あつた。しかしガラリアの湖畔を歩いた彼は云つた――汝等殺すなかれ」と

その後エリオ氏を始め各國代表が起つた。その中には我が宮川女史の姿も見えた。ただ會場の廣大であつたに比して同女史の音聲の餘りに微少であつた爲めに會場の中央にゐた私にさへその要旨が聽きとれなかつた事は殘念であつた。當日演說の精華はドイツの代表シュライベル夫人のそれであつたことは誰も疑ふまい。彼女の粘り強い音聲と堂々たる容姿そして明確な佛語の發音とは彼女の聰明と相まつて滿堂の聽衆に深い感動を與へずにおかなかつた。

戰の後ドイツのある一人の母は戰場に彼女の子供の屍を拾ひに行つた。平原に日は落ちた。尋ねる屍は未だ見付からなかつた。其時フランスの百姓ら

しい一人の女が彼女に近ついて、

「もし私の家の貧しい床でよかつたら、どうか一夜お過しの上明日又おさがしになることも出來ませう」

と懇に云つた。

「貴女は御存知ないかも知れませんが私は獨逸の女であります」

「しかし、マダム、私達を併せる力は私達を離す力よりももつと强いのではありませんか」——

彼女は付け加へた。

「諸所の國境が失せて、國が人類の一部落となる日のあるを疑はない」

と

喝采は止まなかつた、シュライベル夫人はベルギー代表の手を握つて聽衆の前に立つた。それは一つの生きた劇であつた。

——伏屋爲介氏——

◇新刊寄贈書籍◇

新しき時代とは何か

室伏高信氏著

新しき時代とは何か、民衆闘ふべき乎、フセン ファンに與ふ、人間不安、農村の問題、靈の王國、その他

定價 壹圓八十錢

東京府下大森不入斗批評社

黎明のさゝやき

西田天香氏著

一燈園文庫の第二輯である。序の中で、「二時間あまりの講演では到底その一端をもきいてもらへぬ心殘りを、求められるまゝに此の小册子で補ふことにして筆をとつたものである」とこの著者は云つてゐられる。

定價參拾錢

京都市烏丸頭小山下總町回光社



努力。哄笑。宇宙

目次緋紗子

人が眠つてゐる時も
わたしは懸命で努力しやう
そしてその結果が
冷笑でむくひられやうと
哄笑で終らうと
それ等のすべてを超越しやう
わたしの藝術はわたし自身の姿
わたしと云ふ人間が過古、現在をとほして
なほ未來も
二人と存在しない以上
わたしの心を誰が知らうぞ

まぶしい庭にも
日輪を戀ふ日向葵は黄金の色に燃え
深紅のダリアは情熱にほてる頰を
そつとうつむけてゆらいでゐる
だが、花の神秘を誰がとらへられ樣ぞ
わたしは自分にあたへられた
時間と空間のなかに
生命のかぎりをつくして

多くの事を知り又考へ
思つた事をこの地上になげつけて
そしてわたしも
宇宙の中にとけこんで行くだけだ

畑に出でて

坂本茂子

眞晝の苦熱から
やつとよみ返つた畑の葉つぱが
ごわ、ごわとのりをつけた
浴衣のすそに、そでに
さわやかな夕の挨拶をする。

湯上りの白粉が
ゐりもとにほんのりと香つて
私は畑の女王様

葉がくれのよわ〳〵しいつるに
大きなきゆうりが私の目を驚かせる
ぽつつりと切つてふり上げると
子供等がわつと歡聲をあげる

さや豆も籠に一杯になつた
こかぶも兩手に山もりだ

うれしい、うれしい畑のゑもの
しつとりとしめつた浴衣のすそに
さやさやと里芋の葉つぱが
いつ迄も私に何かさゝやいてゐる

新刊紹介

婦人の書架

消費組合巡禮

本位田祥男氏著

私はこの書を全ての婦人の書架に贈りたい。

約一世紀の歴史しか持たない消費組合の運動が――諸外國に於て今日どんなに偉大な勢力となつて社會的に働いてゐるかを知るにつけても、この運動の本質がどんなによく現代人の求むる處と一致してゐるかを證するものだと云へるだらうと思ふ。

私たち婦人の仲間の先覺者有志等は、政治的に經濟的に、社會的にそれ／＼の途に解放を求めて、所謂婦人運動を進めつゝ苦闘してゐる。然し、考へみると、どの運動も／＼何と先きの見究め難くはるかなことであらう。又、少數の先覺者、有志等いろんな意味に於て恵まれたる婦人たちがたゞその人たちだけがそれらの運動を引ずつて行つて、大多數の婦人一般はいつも置き忘れられたやうに、まるで直接の交渉なしに溺み切つてゐることも淋しい。

それらのものの足りなさを充してくれるものに、この消費組合の運動があるのだと私は思ふ。この運動が自ら消費を司る婦人の立場からするのに最もふさはしいものである事は今更云ふまでもないが、漸くこの運動の第一歩を踏み出したにすぎないわが日本で、本書のやうな各方面の材料を網羅した參考書を得た事は、急に大道が展けたやうな思ひがするのである。著者はその序の中にも、消費組合運動に就いて書かれた材料を成るべく多く集めること出來るだけ多くの個々の組合を訪ねてこの運動の本質を摑まうと努力しながら歐州巡遊の旅をつゞけたこ書いてゐる本書はその土産物がぎつしりつめこまれてあるのである。

定價　貳圓參拾錢
東京本郷弓町日本評論社

光を掲ぐる者

荒畑寒村氏著

「今日書を著はし書を賣るもの、一こしてそれが天下の善書古今の良書、稀代の賢書だこ廣告しないものはない。僕は本書の筆者として、これが天下の惡書、古今の劣書、稀代の愚書であることを斷言し、保證し吹聽する。貧民は富豪を富ませ、愚者は學者を富ませてゐる世の中であるから、

僕の著書の如きも亦、明らかに存在の理由と價値を有するこ信ずる」と、著者は「はしがき」で云つてゐる
　これが、所謂天下の悪書であるが故に無産階級者にとつては、必讀の書でなければならないのである　讀む人は、社會運動家としての著者の深刻な体驗から生み出された犯すべからざる嚴粛さをその内にみると同時に、いかに豊かな藝術家的天分を氏が持つてゐるかに驚くであらうと思ふ。

定價一圓八拾錢
東京呉服橋際事業の日本社

幽靈讀者

山田清三郎氏著

「幽靈讀者」「新聞社」を喰ふ」「特種事件と支局長」「二新聞の競争こ一人の苦學生」等はいづれも新聞社の支局の主任や配達苦學生の生活を描いてゐるが新聞事業が營利事業として成立するためには、恐らくこんな無理なことや矛盾が裏面に澤山かくされてゐること が、想像される。資本主義の經濟組織では需要があつて、供給があるのではない。供給があつて、需要が强制されることがあるのだ。消費され得ない生産額をむりやりに消費しやうとするのだ。いな消費されなければならないのだ。要らない新聞を投げ込まれて、無理にとらさることこ、それに對して「〇〇新聞おことはり」といふはり札で應戰すること。さうした私たちの日常生活の何でもない一面に、所謂資本主義のからくりがかくれてゐることが山田氏のこれらの小説をよむことによつてはつきりと知ることが出來る。

○

　かう見てくると、作者は一見素朴で、端的な、手堅いリアリズムに立つてゐるが、それの視野は可成りにひろく、まだそれらを取扱ふ手法や表現にも自由な變化がある。すでに作者はよき出發をしてゐる。作者は在來の文藝の傳統の何ものによつても誤まられ、けがされてゐない。そこにこの作者の强味がある。
　私は作者の社會思想に就て餘り述べなかつたが、それは今更贅言を費やすまでもあるまい。山田氏は新しい社會と時代との黎明を呼吸する力強い僚友の一人こして立つてゐる人である。この著作集の一册は所謂プロレットガルトの立場からも何人にも一讀されて然るべき好著だこ信ずる（完）

定價　壹　圓
東京芝新櫻田町解放社

常識の社會主義

北原龍雄氏著

　議論としての社會主義の書物は、今ではいくらでもある。然し、極く手近い問題から、常識こしての社會主義を敎へてくれる書物は非常に少ない。今日の社會生活に對して、これだけの常識は、何人も持つてゐなければならぬと思ふ。敢て、本書をおすゝめする所以である。

定價五拾錢
神戸市湊川二丁目上西書店

草かり

靜香

雨あがりの急に照りつける朝だつた。郊外の山の中腹にある私の家の前に細い小道がある。それが兩側から繁る雜草で被いかぶさつて、僅かに片足入れる位しか道があいていない。此程から思ひ〳〵して漸く寸暇を得たので私は始めて鎌と云ふものを使つて見た。思つたよりも無造作にサク〳〵と氣持よく草はなぎ倒されてゆく、けれ共もの丶十分とた丶ない中に、私の目は流れ落ちる汗で明けてゐられない程になつた。

私達ばかりじやない、大勢の人達が通る路だ、雨に、露に裾をぬらし乍らも、矢ツ張り通らなくてはならない路だ暑くても、苦しくても徹底的にやつて仕舞ふ。と私は手拭で汗にしみる目をぬぐひ乍ら亦始めた。やがて半分程と思ふ處迄切り開いて來た時だつた。すぐ道の上の別莊の裏庭に手入れでもしていたらしい中年の紳士が、下りて來て私の鎌の使ひ振りを眺めてゐたが、やがて

「大變ですね――然しこの道はお宅だけが通る道ですからね………」と吐き出す樣に云ひながら、のそり〳〵所謂私達の通ると云ふ其道をやつぱり通つて行つた、お前の家に通じてゐる道だ、だからその手入れをする位はあたり前だ、と云ふ言葉を明らかに樣子に現はして…………

私の手は急に動かなくなつた。額から汗がポタり〳〵音をして草の上に落ちる。そよとの風もない首筋がありたの

ぴり〳〵する。鎌を持つたまゝ私は考へて見た。本道ではないにしろ、此道は朝に夕に、かなりの人が通るじやないか、露にぬれ乍らも、草を分け乍らも、それだのに彼はなぜ私達だけが通る道だと云ふのか、なる程私が此道を通りよい様にしやうと思ひたつたのは、矢ツ張り此雑草の被いかぶさつた道を通るのが不快だつたからにはちがいない。然し私の住んでゐる處は奥山の一人住家ではない、行きつまりの道ではない。いきほい自分達以外の人も通るゝ云ふ意識を忘れるわけにはゆかない。事實はどこ迄も事實にちがいないからである。

そこで私は泌み〴〵ゝ小ブルジョアが抱く此種の代表的な意識をのろはしく思はないではゐられなくなつた。

弾かれた様に、私は亦鎌を動かし始めた。

「……これは有難い、こうするとホントに通りよくなるね……」と誰かゞ云ふ聲がした、私が振り返る間もなく職人風の三人連れの男が、私の側を遠慮しながら、こう云つて通つて行つた、すると丁度其時、此小路下の家の庭に洗濯物を乾してゐた老母が、思はずつり出された調子で、

「ホントに人助けです、どんなに玆を通る人が助かるか知れません…… でもよくまあ……」

と感心したと云ふ様子をしながら、變つた服裝の私を干物の手を休めて暫らく見つめてゐた。私はもう流れ落つる汗をぬぐう間ももどかしく忙しく鎌を働らかせた。

「お前達達丈の通る路だ、邪魔になる雑草や障害物はお前達目身でとつてゆけ、自分達はあづかり知らぬ事だ…」と云ふ意味に、言葉を替えて其裏を云へば、「私達人間が人間らしく、眞直に進むために通らなくてはならない道だ其路に横はるあらゆる障害物を自分達の手でとり除く事は私たちの自由だ」と云ふ事になる。此意識が日本の六千万國民の五千八百萬の働らき人に徹したら。そして其通り動いたら……

私は鎌をおさめて立つた。日はもうかなり高い。草できれたのだらう、左の手の處に血がにぢんでゐる、右の掌にはマメが四つ、手は感覺を失つた様にしびれて居た

一九二六、七、一〇

暑苦しきなやみ

向島スヱ子

貧乏人には至極結構に出來上がつてゐる皆の夏も仲々に暑苦るしいので午後の何時間かは悪戰苦鬪、矢張り相應以上にこたへることです、でも筑波颪に吹き晒らされる嚴冬の頃を思へばどれ程樂なことか！第一に經濟の上に……家に歸れば誰れにも遠慮は入りませぬ、中形の洗ひ晒しでも結構、時には裸體で晝寢も出來まする。五錢のアイスも飲みまする、まあ若い女としたことがと何處の方がおつしやるかも存じませぬが、若い女だからとてやはり普通の人間です。

殊に！殊に私などは人樣から常々卑見されてゐる商賣―お恥かしい話しですが、秋は或るカフエーの女給です、本當にお恥かしい話で、――赤い靑い綺麗な電燈の下で夜更けまで、動いてゐる白いエプロンの女給で、ですもの人樣から良く思はれないのは當り前、卑まれるのも無理ならぬこと。

そのカフエーでナショナル登錄器を前に、腰かけたなり私は計算係をしてゐます。

ですから仕事は違つても同じカフエーで働いてゐる以上帳場のすみッこで事務を取つてゐる以上、客の應待こそ致しませんがやはり同じ女給としか思はれません、只違ふのは月給を頂いてゐるだけ、それだけです。

午後三時頃から夜の十一時頃迄の仕事、別に苦しくはありませんけれ共厭な商賣です。何だつてそんな仕事を、外に何か有りそうなものを――　ですけれども皆さん、仕方がない人です、外に格好の仕事が見つからないのですもの私が意氣地が無い爲かしら、

私はこの仕事にありつく迄職業紹介所の紹介狀持參で幾日足を捧の樣にしたかしら、紹介された先々で何度悲觀する返事を聞かされた事かしら、就業難は私を苦笑せさる更りにゾツトさせます、心さへ眞面目ならといふ小さな考へで、只今の仕事に甘んじては居りませぬが從つてゐます。

でも私はこれも職業の一つだと思ひまして、兎に角懸命に働いてゐます、間違つてゐますかしら？私の考へは！

夕方頃までは殆んど遊びで、夜になるとさすがに此頃は忙がしくなります。

散歩がてら涼みがてらの客が多いので、コーヒー一杯で何時間かを過ごす客、ソーダ水を飲んで歸へる方、觀音樣を前にして相應に大きい私の店だけに種々の客が澤山まゐります。

それ等の客と他の女給さん達の應待やを、カウンターから見て見ぬ振りに眺めてゐる私も、近頃は大分仕事に情緒に馴れて來ました。

が、しかし馴れて來たとて何時迄も此樣な商賣にたづさはつて居るわけにもまゐりますまい。段々と心まで馴れ染むことを恐れます故、それで無くてさへ先日の報知新聞に「結婚について職業婦人の嫌はさる理由」なんて何處だつたの相談所の主任さんが

「だらしが無くてかつ禮儀を知らぬ」

「何んとなく情味に乏しくすべての點に於て理屈ツポイ」

「何んかと云へば直ぐ向方から別れ話を持ち出す」

「割合に贅澤で買ひ喰ひが好きだ」

「しう恥心に乏しい」

「男を何んとも思つてない」

「經濟觀念に乏しく金を使ふ事を何んとも思はぬ」

と言つた樣なことを十二ケ程條目に上げて指摘し、職業婦人を痛罵してをられる、此頃の有樣ですもの――

况んや私の樣な商賣にたづさはつてゐる人は到底浮ばれません

さても惱ましき夏よ――

暑苦しき夏よ！

主人と婢

前田つぎ子

此頃知り合ひの一未亡人が來て、四方山の話の中に彼女の家に廿年以上勤續して居る一老婢の事を話し、老婢の忠を讚へる裏に自分が如何に善く彼婢を待遇して來たかと云ふ事をほのめかして居る。

抑も此未亡人は卅歳位にして三兒を抱へて夫に死別し、其後四十歳を超したる今日まで自分の細腕に自分等親子四人の生活を支へ三兒もそれ／＼教育して來て、上の子二人は既に商大と商船校に學びつゝ有るが、此未亡人の背後には一老忠婢が有つて、不幸な若未亡人を援けて今日に有らしめた事は、全く美しい犧牲心の現はれで有る。未亡人も亦其點は認めて何かの機會有れば表彰方を何處かへ願ひ出やうかなどとさへ云つては居る。此處迄で考へを止めて置けば只從來の道德律に良く當て嵌た犧牲心の現はれ、憐れみ深い主人と云ふ事の生きた標本を見る事が出來るが、今少し深く考へて見ると、平等觀念を比較的餘計に持ち合はせて居る者の心中には少し不滿足の感が起らずには居らない。

此忠實なる老婢は、齡、既に七十歳を越へ腰は殆んど九十度の角度を爲して曲げて居る。暑い寒いも始終身にこたへるから、働きも從前の樣には無論行かないので、本人も東京近郊に細やかながら、一家を持つて居る孫の家へ歸りて餘生を送り度いと云ひ、孫も老祖母の歸つて來る事を頻ゝ望んで居るが、主人たる未亡人は今歸られては私が困る代りの者が見當る迄は歸されぬと云ひ居るが、此節下駄代と煙草錢とを報酬として受けて此老婢の代りに奉公に來る者が何處の國に有らう。（此忠婢に報ひられて來たものは

廿年來四季の着物と下駄代と煙草錢なのである）

此忠婢は、只此不幸なる若未亡人や幼き子等の上に同情して全く自己の生涯の何分かを犧牲に供して盡して來たので有るが、老衰退嬰漸く休養の時が欲しくなつたので、孫の許へ歸り度しと望んでも、主家の所謂「御都合」は之を許さないので有る。被雇人たる婢は自己の都合は一切捨てゝ廿餘年主家の爲に盡して來たのに、雇主は今僅か斗りの自分の「御都合」をも犧牲に供して此老婢の爲に盡してはやらないので有る。之では餘りに偏務的では有るまいか、尤も從來我國の主從關係は之で濟んで來たので有るが、之は今日我々の目から見ると支配階級と被支配階級の權力の差異を餘りに明確に見せられる。凡そ社會が存在する限り階級は何時何處の國にも何等かの型に於て現はれて居り、又社會組織の上に階級と云ふものは必要なのである。決して或一派のユートーピアンの云ふ樣な無差別無階級な時代は來ないので有る。人間の頭腦が悉く無差別に構成されて居らぬ限り…、即ち頭蓋骨の大きさ幾何之に抱含する腦味噌何百何十匁と數理的に構成されて居らぬ限りは頭腦の働きは千態萬樣の形式を執るで有らう。善惡、美醜、馬鹿、怜悧等々之即人間生活に階級を作り出す基で有つて如何ともする事は出來ないので有る。又此階級が有る爲に社會の秩序が良く保たれて居る場合も有るので有る。然し此階級意識が餘り強くなり過ぎて、支配階級と被支配階級の權力の差異が餘り甚しく世相の上に現はれて來る時は、識者の思考を要する秋では有るまいか。

以上は雇主被雇人關係に就て云つたが今日我國の男女兩性の間にも亦、意識的無意識的に此支配被支配階級觀念が相當堅固に築き上げられて居る事は私が申す迄もない。本來人格上平等で有るべき男女兩性に對して、今日迄の日本の社會道德が要求した處は如何であらうか、尤も佛蘭西のデュルケームか誰かの說の樣に個人は常に社會の潮流に左右されて居るもので、自殺者は自殺するに非ずして自殺させられるので有る。信仰は爲るものに非ず、させられるものであると云ふ見方によれば、人は其時々の環境に支配されるので、どうしても他の支配を受けねば存在の出來かねる樣な環境に置かれたものが被支配階級になる事はさけ

難い事では有る。即ち下女下男たる以上の能力を持たぬ者もある。又男子と對等に立て行かれぬ婦人も有る（同時に婦人に劣る男子も決して少なくないので有る）然し僕婢として働くもの、必ずしも使用する主人たる者と人格上劣るものと斷定して了ふ譯には行くまい。又從來日本の婦人は男子の從屬物たる如き環境に當て篏まり…篏まり得る樣に作られて來たのでは有るが、今日の時代は既に之から大分進んで居る筈で有る。然るに尙今日でも、日本の社會道德が女性の貞操觀念に就て要求する處は頗ぶる嚴で有るが、男性への其の要求は如何？良妻賢母は女學校敎育の第一條件で有るが何處に良夫賢父を敎へる中學校が有らう、夫の爲に良き妻子の爲に賢き母、何の爲に何と、まるで女性は何物かの爲に生れて來た樣な者で、生れながらにして被支配階級に置かれて居るかの觀が有る。然し殆んど傳統的に左樣慣らされて來た我々女性は、今更それが大した不自然とも感じる事なしに、支配階級（即玆では男性を意味してゐる）　のあつぱくをも一種の宿命的のものゝ如くに考へて了ひ、敢て對抗しやうともしないので有る。然し斯かる狀態に有るが故に、永劫女性は被支配階級に在るべきものと決定されたものでは無い。今日では、女性自身が漸次此被支配階級觀念から覺醒して行くのは、大いに欣ばしい事で有るが、未だ〳〵數の上から云へば醒めない方も多からう、婦人雜誌類を見ても、貞女節婦の話は每度二號活字の標題を附して載せられて居るのを見るが、之に必敵する男子の記事を見た事を覺えぬ。强ち雜誌が「婦人」何々と名乘つて居る故では有るまい。女には貞操を八釜しく說き之を實行し得た者を表奬に努めるが、男子に對しては如何と申し度くなる。どうも今日の社會道德律は少し片手落ちの觀が有ると不平を申して見度くなる。

　主人と婢の關係といふ事から話は少々橫道へ外れた樣だが、玆で話を後へ戾して考へて見るが、一身を犧牲に供して主人に仕へた忠僕忠婢が有れば、一方には被使用人の待遇上表彰の價値を認め得られる主人の出現を望むもので有る。主人は主人なるが故に被使用人に對する義務は三分、被使用人は被使用人なるが故に主人へ對する義務は七分八分乃至無限ではドレイ制度と幾干の差が有らう！

從來多數の人々は主人は召し使ひをいたはり使いと云ひ使ふ者も自分は斯く々々して召使ひを勞はるこ得々こして云ふ。抑々憐れむ憫れむなごと云ふ言葉は强者が弱者に對し、支配者が被支配者に對して用ふべきもので有つて、過去の慣習制度は暫く措き、既に現在の社會組織の上から見て、主人こ被使用人たる僕婢の間に、憐愍の意を含みたる勞はるの詞は意味の取り方に由りては一種の侮辱では有るまいか。ドレイ制度の存在せぬ限り、雇ひ主が社會上の一個人で有るのと同じく、被雇人亦一個人で有る。然れば雇主は被雇人の勞力を要求し、被使用人は己の勞力を提供し之に對する報酬により生活を營む迄の事で有る。則被雇人は雇主の用事を補助する職業で有つて、其補助するに當りては親切を盡すべきは勿論で有て、職業で有るから命ぜられた事丈けして置けば我能事了れりといふ様な根性は持つべきでは無い。主人はまた被雇人の個性を認め同情を持ち勞を犒うべきは勿論で有るが憐憫即强者が弱者に對する詞は用ふべきでは無いこ思ふのである。

齊藥時は精神病者が殖へると專門家が發表して居られる。兎に角今時分は誰しも種々の刺戟を享け易くなつて居る様で有る。平生何物に對しても極めて鈍感な私がフッとこんな不平を云つて見度くなつたのも陽氣の所以かも知れぬ。用心々々　（十五年五月）

近況　堺眞柄

病氣で、田舎へ行つてみたり入院したりしてゐますので、御返事がおくれました。メッタ病氣もせず、「お丈夫ですね」と人さんからおだてられてつい無理をしてゐたものこみへまして、ジンゾウエンなどにかゝつたのです。こう病人になつてしまうと働いている人々が、如何につかれて如何に害されつゝあるかといふ事ばかりが氣になります病中にさへ生活の不安がくつついて來るのですよ

笑へる海（散文詩）

富田常雄

日曜日の海が貧しい子供達を呼んだ。

驚異とよろこびに小さくふるへながら、貧しい官吏の子の兄と弟が汽車の窓から叫びを上げながら、海へ小さな魂を走らせた。

別荘地の海は肥えて居た。水平線と入道雲が灰色にいぶし銀にぼかし合つたあたりに雨をはらむ風がよどみ、赤いヨットの帆かげが波をなぜた。

――赤いヨットにはおこぎの王子が乗つてるのかしら

――あんな赤い船、買つてもらをこ、

はだかの小さな兄弟が波の中で首をかしげた。

濱は午後を別荘の娘たちの樣に晴れた、

はろばろと紺碧の頭をもたげて立ち上ると、波は白泡にくだけながら濱に笑ひ聲を立てて行つた

太陽は入道雲のわれ目から放射線を落し、はなやぐ海は笑つた。

「土用浪ぞ！」

膃肭の樣に濱にむれた海水着の青色が、緑色が、紅色が午さがりの太陽の放射線を虹の樣に反射

しながら。メガホンの向いて居る監視所へ一せいに首を向けた。

「海は荒れるべ、雨がくる、風は強くなるべえよ。赤だ、赤だ!!」

漁師の監視人は小手をかざした。沖へ、空へ、

赤い旗が八月の風を呼び始めた。

日曜日の子は小學生の兄と波の笑ひくだけるあたりで無心に遊んで居た。兄弟は笑つてゐる。海は深い呼吸の下で笑つて居る。

――海、海、ねえ、ほんとにいゝね。

けれども――

「兄さん――兄さん――」

小さな弟は足の下の砂がすべるのを見た。足はすくはれた。ひき波はたゞ笑つて幼兒の足につき當つただけであつたが。

幼兒は沖にかへつて行く波に鞠の様にまかれながら、青い海底の斜面をころがつて行つた。

太陽は放射線を澱に落してゐる。海底は靜かに、波はその上を子供の様に笑ひながら走り廻つた

小さな魂が水壓に逆流した。幼兒は海底の青いひとみの中を蒼白く流れて行つた。今度は靜かに

――小さな足は白かつた。

涙をため、驚きにふるへる兄のひとみをさへぎる土用浪が、日曜の兄弟を沖の漁火と山の灯の様に遠ざけて行つた。

「兄さん―― 兄さん――」 海は哄笑した。



憐憫の要らない世界

若杉鳥子

みよ子は其頃、ある富豪の家に身を寄せてゐた。始めは食客だつたのが段々と落ちて、終には文字通りの下婢となつてしまつた。

孤子同樣のみよ子は、さうして他人の手から他人の手へと少女時代を渡り歩いて過した。

他の奉公人と同じ樣に、自分の時間といふものを少しでも與へられないみよ子は、まるで盜人のやうに、暗い物影に入つて、疲れた足を撫でさすつたり、叱られるかと思つて、おど／＼しながら新聞の拾ひ讀みをした。時々朋輩などゝ立ち話をしてゐると、喧しい肥つた主婦に發見されて、油を賣るな――と口汚く罵倒された。

自分は何故こんなに、他人の顏色や思惑を窺ひながら生きるやうな、卑屈な精神を持つやうになつたのだらう――とみよ子は何時でも、自分のみじめな狀態を恥ぢ恐れた。

夜だけは自由な時間といふ事になつてゐたが、事實さうはいかなかつた。

だら／＼と用事が流れ出して來た。夜の間に足袋の穴でもかゞらうとして電燈の下に座ると、古參な朋輩がやつて來て肩を叩けとか講談を讀んできかせろとか、小さいみよ子に色々の要求をした。

それを不機嫌な顏で迎へやうものなら、意地の惡い復讐をされなければならなかつた。

兵營も工場も家庭も、人と人との集合する處は、何處でもこんなものなのかも知れないと、みよ子は今迄の經驗から運命に從順だつた。そして外部からは始終世間といふものが、恐ろしい『やみわだ』のやうに、不幸な彼女を壓迫しつゞけてゐたから………

するとある日、その家の織るやうな訪問客の中に、眼覺めるばかり若い美しい夫人があつた。それはおそらく幸福の標本みたやうな女でゝもあつたらうか？

その瞳は、まだ甞つて世の中の、汚い影、暗い影をも浸した事のないやうに澄み切つてゐた。然しその大きくみはつた瞳は、凝視する勇氣さへあるならば、どんな事象をもはつきりと映じさる事の出來る明敏な瞳であらう。

淑やかな落ち着いた夫人は、廣々とした書院に通されて其處で暫らく此の家の主婦と對話してゐた。

時刻が來たのでみよ子は夫人の前に中食の膳を運んだ。鎌倉彫か何かの古風な高い膳へ日本料理が並んでゐた。

主婦がその美しい夫人にいふには。

『春子さま、御ゆつくり御上り遊ばせ、私は彼方にお待たせしてあるお客樣がありますから失禮いたします』

美しい夫人は恐縮しながら靜かに、

『ほんとにお忙しい處を……お給仕は自分で致しますから、どうかあなたも私にお構ひなしに彼方へ――』

再參さう云つて辭退した。

すると主婦が、

『なあに、あなた、この人達にお給仕をさせてお遣りになるのは、寧ろお慈悲なんでございますよ、斯うしてあなた、お給仕のお盆を持つて座つてゐる時が、この人達にとつて一番極樂なのぢやありませんか、足を休めたり、手を休めたり……御覽遊ばせ、本人は喜んでゐるぢやありませんか』

寸時も手足を動かさずに置いては損だといふやうに、主婦はヂロリとみよ子の方を見た。

みよ子はあかくなつて首を垂れた。

それ程、下婢の心理を知りながら、束縛しなければならない、酷使しなければならないのはどういふ譯か？その上に客への御馳走まぢりに、人前で弄らなければならない心理に至つては………みよ子は涙ぐんだ。

春子夫人は堪え難いやうに、

「まあ、お可愛想に……」

さう云つて俯向いてしまつた。

みよ子は自分自身に對して繰り返した。

——まあお可愛想に、おかあいさうに、おかあいさうに……まあ何といふ飾り菓子のやうな同情だらう。見た處許りで大しておいしくもなさゝうな同情だらう。ほんとに自分はお可愛想だ、他人から見てもお可愛想なんだらうか？

その同情の言葉によつて、一層自分の境遇が悲慘なものに思はれて來た。

みよ子は毎日毎日、春子夫人の優しい聲が、自分の耳朶に、こびりついてしまつたやうに、

「まあお可愛想に——」

といふ聲を聽いてゐた。

あゝ憐憫といふものは時々、殘酷な役目を演ずるものだとみよ子は思つた。甘美らしく見せかけて綿を嚙ませられるやうな同情よりも、却つて人情の鞭の痛さの爽快を自分はより喜んで撰るだらう——人間が人間に、憐憫などゝいふ、まやかし物の贈答品を遣りあはなくてもいゝ世界、誰もが幸福で富みあつてる世界——みよ子は、空想でいつぱいになりながら、さういふ社會を描いて涙を拭いた。その日から今もずうつと——



受難の生活

相原玲子

健一は學校から歸つて低い二階の室に入ると、投げ出す樣に本の包を置いて物うさうに、机によりかゝつた。

薄い日の光りはずゝけた障子にうつゝて、ポット消ゐたり輝いたりして居た。健一は兩手で顏を支へて眼を閉ぢたなり身動きもしなかつた。彼の頭には過古から現在までの生活が往來して居た。國を出てから四年、可成り長い年月を經て居るけれども、彼の生活は相變らず苦しかつた。否むしろ苦しさは加つた。國を出た翌年の春S町の中學校に首尾よく入學はしたけれども其の費用を主人から出して貰ふため、彼の肉體的勞働は隨分苦しく激しかつた。朝は倉の酒造りの若者と一しよに床を出て、店の掃き掃除、臺所の水汲み、庭や表通りの掃き方と、隨分仕事が多かつた。

それが終へると朝飯、朝飯をすまして馳足で學校に行くのだつたが、時々時間におくれると、體操教師等には白い眼でにらまれた。時には放課後校長室に呼ばれて、意地惡く遲刻の理由などを問ひ正された。併し健一は何も言ひわけせず、下唇をかみしめてともすれば溢れそうな涙をこらへて直立してゐるのだつた。校長や體操教師は彼を怠け者扱ひにして、級の異端者視して、何かにつけて彼をむごく取扱つた。

さうして家にかへれば、又何もかも忘れて働かなければならぬ彼の苦しみ、身に餘る肉體的勞働と、小さい心に堪へかねる教師の壓迫とは、訴へるものゝない彼には筆となつて表れた。

○月○日

出掛の時間がいつもよりおくれて、學校についた時は朝會が始つてゐた。自分の小さい魂は彼のとげ〳〵した（體操教師）顏を見ると、激しく戰いて變に固くなつてしまつた。豫期した如く彼のずぶとい聲が頭上に落ちた。私は言ひわけをしたくなかつたので、默つてゐると彼の聲は尙高くなつた。

其の聲を聞くと私の心は、不思議に平靜を取り戻した

○月○日

あゝ我が生活は絕望だ。激しい肉体勞働と、魂に對する壓迫は私には堪へられない。無智な男の働く此の酒屋の生活も私は苦しい。

○月○日

今日も相變らず絕望的だ。勉強する氣にもなれない。今日學校から歸つてボンヤリしてゐると母が二階に來た。母の眼は自分に哀願するやうにふるへて居た。そして之をお上りと言つて牛乳一合と菓子を呉れて下へ降りて行つた。トントントンと母の足音が下に消えた時、私は二つの品を抱いて泣いた。暫らくすると又母の足音がした。そして自分の傍にすわ

つた。「健一お上り、そして體を丈夫にしておくれ、決して無理をしないでね。親一人子一人だもの」

あゝ此の母がある。誰がなくても此の母がある。私は死なゝい。

彼の日記帳にはこんな子供らしくない色々の苦しみが毎に書かれた。こうした苦惱の日が何日も續いて、長い月日は流れて行つたのだ。丁度或月の月曜日例の服裝檢査があつた。此の中學に或事件が起つてから急に服裝等をやかましくされて、靴もはかねばならなかつた。健一はそれを求めて貰ふのが心苦しく、何時も下駄をはいてゐた。所がそれが體操教師の目についたからたまらない。大勢の前で大聲でさけばれた。

「お前又怠けたな、靴をどうした」

「私にはございません」

「何ッない？明日までに買つて來い」と言ふやいなやガンㇳ一つなぐられた、彼はなぐられると落ち着いて來て、聲を上げて其の無法をさけびたくなつた、彼はつか〱こ前に進むと美しいひとみを輝せて言つた。

「みなさん、私はまだ十七の少年です、併し魂はあります。そして私はそれは慘めな貧乏な生活をしてゐるのです。父もありません。家もありません。母と只二人此の市のある家に下男見たいな生活をしてゐるのです。

けれど自分はそんな貧乏な生活をして居ても勉强したいために、母の心づくしによつて學校に通つてゐるのです。それだから靴もはけません。併し――――其の靴をはかないとて怠け者でせうか、はきたくても、求められないのです。私は靴をはかなくても宇宙の眞理は見出されると思ひます。學校又は恩師への叛逆者が果して靴をはいてる人間からは出ないでせうか。私は自己のために學校へ來てゐるのです、人は体のみをしばつて滿足してゐますが、体は束縛されても私共の自由と眞理に憧れる心は束縛出來ないと信じます。私共にはそれがせめてもの他に求められぬ幸福でせう。「靴こ索足」それがどれだけ私どもの將來に影響あるか考へて戴きたいのです」

誰一人答へるものはなかつた。

其の日學校から家にかへつた健一は、朝の彼の行動を考へるこ、痛快でたまらなかつた。あの時の校長こ体操敎師の顔、それが彼の胸を往來する。其の日から、健一はほんとうに明るい氣持が持たれた。日記は次の如くかゝれた。

○月○日

今日ほど痛快な時はなかつた。何かにつけて自分にあたゝ体操敎師のあの時の顔、私は痛快だ。何だかこう私の前に明るい日が巡つて來たやうだ。ほんとうに私はこれから何物も恐れず進まふ。私が生涯に記念すべき日、あゝ○月○日よ。

其の日彼はカバンを投げ込んで暫らく机によつてゐたが、身内からうれしさが湧くやうでじつこして居られないので下に降りてゆくこ母はニコ〳〵して「何ですよ子供見たい」と言つた。

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
大正十五年七月二十七日 印刷納本
大正十五年八月一日發行 毎月一回一日發行

婦人運動

第四巻 第七號

〈定價二十五錢〉